

機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズIFストーリー 悪魔達が紡ぐ
鎮魂歌

リン・オルタナティブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あと皆さんのアンケートの結果で鉄血IFを書くことにしました。どうぞ期待！（途中で諦めそう……）

←タイトル

旧タイトル：ガンダムデータアーカイブ鉄血のオルフェンズ編

2020年4月30日

ASW—G—68 設定資料提示

ASW—G—30 設定資料提示

2020年5月1日

ASW—G—32 設定資料提示

2020年5月2日

ASW—G—28 設定資料提示

目次

設定資料編

A S W | G | 2 8 | 1

A S W | G | 3 0 | 3

A S W | G | 3 2 | 5

A S W | G | 6 8 | 7

厄災戦過去編

プロローグ 厄災戦の異分子（イレギュラー） | 9

プロローグ #2 | 13

プロローグ 3 そして300年後（原作）へ | 17

一期編

鉄と華と…… 異分子（イレギュラー）と | 22

鉄華団 | 28

設定資料編

ASW—G—28

GUNDAM BERTH (ガンダムベリト)

型式番号 ASW—G—28

所属 不明

全高 16.2 m

本体重量 37.4 t

武装 ツインソーサー

315口径ローリングミサイルポッド

腕部収納型電磁ナイフ

搭乗者 茅蝸 クミヨウ (ひぐらし クミヨウ)

ASW—G—28 ガンダムベリト

宇宙で見つかった火星ハーフメタルで覆われた球体型の物体の中^そにうずくまるような形で格納されていたガンダムフレームのMS^{モビルスーツ}。外部の球体は多少の傷跡があり、劣化が進んでいることが確認された。厄災戦が終結して300年間ずっと宇宙^そを漂い続けていたと考えられている。

機体の方はリアクターやフレームのあちこちの細かい部分にガタが来ていたりとしし心もどが無いが、ナノラミネートアーマーはしっかり手入れされ、何時でも使えるように整備されていた。

機体の肩部には特徴的なミサイルポッドが装備され、いざとなったらパージして遠隔爆破が出来るように設計されているが、パイロットのクミヨウは一度も使用していない。

腕部には折り畳み式の電磁ナイフが仕込まれている。このナイフは通常のナイフと電磁ナイフの二つのパターンをパイロットの任意で切り替えることも可能と言う親切な設定を施されている。

パイロットの茅蝸クミヨウについてだが……レギュウやマウラ同様に、彼女もベリトと共に独自で調査に乗り出したと報告が来た。これで動き出したガンダムフレームのMS^{モビルスーツ}は全部で6機。

——バルバトス、グシオンが鉄華団で、ベリアル、フォルネウス、ベリトが個々で、そしてキマリスがギヤラルホルンで運用を開始したようだ。

さらに追い打ちをかけるかのように……ベリトが動き出した直後に、ベリアルと共に見つかり、ギヤラルホルンの方で嚴重に保管、管理されていたM^{モビルアーマー}A カマエルが起動。今まで通りではなく今度は完全に起動を果たし、配備されていたギヤラルホルンのM^{モビルスーツ}Sや自身が収容されていた火星基地を跡形もなく破壊、蹂躪した後にその場を去った。

——研究会の方では、今回の一件でM^{モビルアーマー}Aの名を、カマエルからベリトと対立していた天使の名、ナバルバへと改められ、ナバルバの追跡を行っている。

今回の一件——あくまで推測の域だが、ベリトが動き出した直後にナバルバは起動した。それは一体何故？——簡単な話だ。恐らく完全に敵対していたベリトが起動した事でナバルバのストツパーが外され、完全に起動を果たした。となると今度^{ナバルバ}奴が向かうところは間違いなくベリトの所……。

計画より少し早い……始めるでしょう……。
第二次厄災戦計画を……

さあ………宴の始まりだ

ASW—G—30

GUNDAM FORNEUS (ガンダムフォルネウス)

型式番号 ASW—G—30

所属 不明

全高 18.9 m

本体重量 35.6 t

武装 アッパーナックル

専用ハンドガン×2

30 mmマシンガン×1

腕部発射型ロケット砲×4 (腕に二本装備)

搭乗者 亜槍 マウラ (あそう マウラ)

ASW—G—30 ガンダムフォルネウス

地球衛星軌道上に2基存在する民間共同宇宙港、ユトランドの奥深く……誰も手を着けないようなひっそりとした場所に安置されていたM^{モビルスーツ}S。地球治安維持を目的とした組織、ギヤラルホルンの襲撃を受け、そこに偶然通りかかった少女、亜槍マウラが乗り込み起動。フォルネウスのツインリアクターシステムは正常に作動し、ギヤラルホルンの一方的な虐殺に介入を開始。と同時にギヤラルホルンの後方から強大な高熱源反応を探知。なんと地中からM^{モビルアーマー}Aが出現。ギヤラルホルンのM^{モビルスーツ}S、グレイズの大群をを蹴散らしながらフォルネウスと合流。厄災戦が起こると畏怖されたが、再び驚きに満ちた。M^{モビルアーマー}Aとフォルネウスはお互いを攻撃せず、むしろカバールし合うという歴史とは全く真逆の行動に出たのだった。その後グレイズの大群を突破されたギヤラルホルンは撤退し、フォルネウスはそのM^{モビルアーマー}Aと共に街を去った。

フォルネウスの戦闘方法は単騎で戦うのではなく、M^{モビルアーマー}Aと共に戦う事……。当時の厄災戦からは考えられない戦闘方法だった。悪魔と天使、相容れぬ二つの勢力が共に敵を潰す。そんなコンセプトでデザインされた機体だろうと一部の厄災戦研究者からはそんな声が上がっている。

それもそのはず。フォルネウスが戦闘を開始した直後に起動、共に発見されたMA（モビルアーマー）に与えられた名は、《ソロネ（Throne）》。座天使……上級天使の名を与えられたそのMA（モビルアーマー）は発見当初の研究者の見解では相討ちで終わったとされていたが、最近の研究と当初の現状から結果は変わり、ソロネとフォルネウスは共にMAに立ち向かい、共に力尽きたと言う結論になったが、賛否両論で未だ解明できない謎もいくつか残っていた。

同じ座天使の《オファニム》は何処に消えたのか、何故ソロネはフォルネウスに味方したのか、他のMAもフォルネウスに味方するか……等々、疑問が山ほど残っている。

だが解決した部分もあった。フォルネウスの戦闘データが発見されたのだ。そのデータの一部には厄災戦時に消えたはずだった幻のMS、《ガンダムマルコシアス》に関する文書も発見された。今回初めて存在が確認されたガンダムフレームのMS、ベリアルとフォルネウスのおかげで計画は進んだ。

しかし……何故フォルネウスの戦闘データは発見されたのにベリアル^{モビルスーツ}の戦闘データが発見されないのだ？

……阿頼耶識で接続されたパイロットのみがあつた頑丈なプロテクトを解除できるのか？

未だベリアルは鉄華団に接触を続け、フォルネウスは新たなMAの搜索……ソロネはフォルネウスと行動を共にしており、時折パイロット……マウラに甘える瞬間がある。カマエルはギヤラルホルンの禁止区域エリアにて現在も厳重保管中。今のが2体のMAとMSの各々の動向を監視してた二班との定時報告の内容だ。

……だがやる内容は変わらない。

我々は第二次厄災戦計画の準備を進め、実行することには変更点はない……（此処で文字は途切れている）

……じき戦争は起きる。第二次厄災戦の時に近い

ASW—G—32

GUNDAM ASM DEUS (ガンダムアスモデウス)

型式番号 ASW—G—32

所属 不明

全高 16.3m

本体重量 25.9t

武装 ワイヤブレード×2

クロスバンカー(パイルバンカーの強化版)×2

腰部収納型サブアーム×4

搭乗者 叢劉藍 ラナカ(そうりゆうらん ラナカ)

ASW—G—32ガンダムアスモデウス

フラウロスが見つかった火星ハーフメタルの採掘場から少しした位置にある洞窟から発見されたガンダムフレームのMS^{モビルスーツ}。此方の状態は少し危うく、フレーム剥き出しの状態で、装甲の殆どは同じ洞窟の端つこに放置されたままだった。アスモデウスは軽装甲、フレームもベリアル達他のガンダムフレームよりかなり特殊で、頑丈で軽い造りを追求したフレーム構造になっておりガンダムフレーム特有の大出力なエンジンにものを言わせM^{モビルアーマー}Aの攻撃をかわしながら近接攻撃を繰り返してその場を離脱……一撃離脱に特化した機体だと言ふことが現状ではわかつているだけだ。

アスモデウスのパイロットには叢劉藍ラナカと言う少女が選ばれた。否。アスモデウスが選んだのだ。

何故か、理由は不明だ。だが新たなガンダムフレームが動き出したのは事実だった。

別の隊からの報告によると、アスモデウスが安置、または放置された洞窟からM^{モビルアーマー}Aは発見されなかったとのことだった。ギヤラルホルンが現在保管中のカマエル、そしてフォルネウスことマウラと行動を共にするソロネが発見され、期待もあったが当然の結果だ。異常性を兼ね備えたフォルネウスとベリアルだからこそM^{モビルアーマー}Aが味方についたのだ。そう簡単に味方につく事態こそがおかしいのだ。

アスモデウスの戦闘データも無事閲覧できるようになり、計画が少しずつ、着々と準備が出来始めている。

モビルアーマー
M Aに関しては問題はない。ギヤラルホルンの方でも嚴重に管理しているため、カマエルには特筆するほどでもない。……しかし、カマエルに関して、奇妙なことが報告された。なんでも少しの間だけ勝手に起動するのだと言う。警戒はしているが数回鳴き声のような呻き声をあげると再び機能を停止するそう。

鉄華団に関しては変わらず、いや、一点変わった点がある。ブルワーズと呼ばれる海賊集団からガンダムフレームのモビルスーツM S、グシオンを奪取したそう。その時にもベリアルは鉄華団とブルワーズの戦闘に介入したとのこと。これで鉄華団が所有するガンダムフレームは2機となった。

モビルアーマー
フォルネウスとソロネも変わらず新たなM Aの搜索に当たっているとの事だ。

今回ばかりは少し妙だ。ギヤラルホルンの地下祭壇に安置されているガンダムフレームのモビルスーツM S、バエルに関しては問題はない。だがバエルを囲むように設置されているセブンスターズ各家の格納庫から、ボードウィン家とバクラザン家の格納庫からガンダムフレームのモビルスーツM Sが消えているとの事だった。ボードウィン家の格納庫にあったモビルスーツ筈のM Sはガンダムキマリスだった筈。……誰かが持ち去ったのか？だが元々バクラザン家の格納庫には何も入ってなかった……。

ギヤラルホルン……君達は何をしでかそうとしている？

ASW—G—68

GUNDAMBELIAL (ガンダムベリアル)

型式番号 ASW—G—68

所属 不明

全高 17.5m

本体重量 32.7t

武装 対艦刀×1 (想像で言うところマルコシアスの大太刀にバルバトスの対艦ランスメイスの大きさを足したもの)

腕部 180mm砲×2

脚部内臓収納型ナイフ×2

折り畳み式300mm滑空砲×2

ドラグネイル

背部展開式小型ダインスレイヴ×1

搭乗者 端虚^{はしごら}レギユウ

ASW—G—68 ガンダム・ベリアル

火星の元々坑道だった洞窟を探索中、かなり奥の方……最奥部で発見されたガンダムフレームのM^{モビルスーツ}S。300年前の厄災戦でM^{モビルアーマー}Aと戦った機体のはずなのに、または当時のパイロットが潔癖性だったからなのか、発見当初の機体は綺麗に整備が行き渡り、2基のエイハブリアクターを搭載したガンダムフレーム特有のシステム、ツインリアクターシステムも正常に稼動し、当時の厄災戦時代の機体が完璧な状態でそこに鎮座していた。

機体の外見は天使を彷彿とさせる機体になっており、この機体は変形機構が採用されており、変形後は背部展開式ダインスレイヴが砲身みたいで——戦車のような見た目に変貌する。研究者はベリアル^{ベリアル}の事を『厄災戦の時は、移動式で簡易の砲台——最後の砦のような役目だろう』・

と推測している。

ベリアル^{ベリアル}の厄災戦時の戦闘データは見つかっておらず——事実はベリアル^{ベリアル}のデータに何重もの頑丈なプロテクトが掛かっている

為、データの解析とプロテクトの突破、そしてそこから得られる厄災戦時のベリアル功績に期待が高まっている。さらにそこに追い風が吹き付けるかのようになり、ベリアルの見つかった洞窟から近くの地点に鳥のような、モビルアーマーM Aハシユマルに酷似した人工物が発見された。モビルアーマーM Aの詳細は不明であり、ひとまずは《カマエル》と名付け、ギヤラルホルンが嚴重に保管されている。

現在ベリアルは最近出来た新しい組織《鉄華団》と接触を開始。同時に未知のモビルスーツM S……ガンダムフォルネウスも動き出した……ガンダムフォルネウスがベリアルと接触が確認され次第、β計画……第二次厄災戦計画に着手、準備に取りかかる。観察監視班のΩチーム、γチーム。慎重を期してベリアルとフォルネウスの監視に当たれ。

…… フォルネウスとカマエル…… この2機のモビルスーツM SとモビルアーマーM Aを今後引き合わせる機会があれば……

面白くなりそうだ（……文字は此処で途切れている）

厄災戦過去編

プロローグ 厄災戦の異分子（イレギュラー）

厄災戦

人類の人口の約四分の一の命を燃やし尽くし、言葉のままの虐殺と殺戮を続けてた厄災の天使……………
モビルアーマー M Aと、人類がモビルアーマー Aに対抗するために造り上げた……………
モビルスーツ M Sとガンダムフレームの……………
太陽系全体を巻き込んだ全面戦争の事だ。

そして……………時を同じくして今、厄災戦末期の最中……………
火星では絶望的な戦況に瀕していた……………。

—火星—

火星のとある地帯で……………
モビルアーマー M Aがたった1機のモビルスーツ Sを完全に包囲していた。

そのモビルスーツ Sは、片膝を地面につけ、疲弊していた。装甲の殆どは食い千切られたかのように所々が破損しフレームが剥き出しになっており、厄災戦の前は綺麗に輝くかのように艶が出ていた鮮やかな純白と群青色の塗装は剥がれ落ち、ナノラミネートアーマーの本領が発揮できずにいた。

顔にある特徴的なV字型のアンテナは、片方が根本から取れ、地面に突き刺さっていた。しかしそのツインアイは、自身の搭乗しているパイロットの意思を増幅するかのように、青々としたスカイブルーに光ってモビルアーマー M A達を寄せ付けない……………
膠着状態に陥っていた。

「……………ごめん。やっぱり帰れなさそうだよ」

——後に悪魔と呼ばれたガンダムフレーム……………
その中の1機であるガンダムアスモデウスに搭乗しているパイロットの名は……………
ラナカ・ストーランド。

純粋な彼女は世間では珍しい、女性で阿頼耶識を使うパイロットであり、アスモデウスへの搭乗を自ら志願したと言う少々……………
いや、か

なり変わった少女だった。

彼女の出自は少し変わった経歴の持ち主で、幼い頃……物心がついた頃から機械に触れることが多かった。それは視覚的にはなく物理的にだ。親の隙を見てはテレビなり何でも触り、触ってはキャツキャツキャツと歓声を上げる……そんな日々が続いていた。

そんなある日、もうすぐ9歳になる成長期の頃……それは始まった。^{厄災戦}

厄災戦が始まると、自身の両親は愛する愛娘を避難させようとした。当然まだ駄々をこねるような年頃のラナカは反抗に反抗を重ねたが、親の……両親の言葉に渋々従い都市部からかなり離れた辺境の田舎に避難することになった。

“お父さんとお母さんは、必ず迎えに往くからね”

その言葉を遺して両親は死亡。M Aのビームを受けて焼かれて死んだと……まだ10歳にもなっていないラナカにとつては……絶望の底に完全に沈むのにそう時間はかからなかった。

それから彼女はずっと独りで……孤独で過ごし続けていた。同じ境遇の子供はラナカの他にもごまんと居た……だが彼女はそんな子供達よりも絶望し、孤独になった。瞳には光が無く、その瞳の中身は虚無の一言に尽きるものだった。

そんな彼女を絶望の底から引き上げた存在が……ガンダムフレーム^{ガンダムフレーム}だった。

ガンダムフレームはM Aを倒す唯一の手段……その事実を知った彼女はガンダムフレームと呼ばれるM S乗り^{モビルスーツ}だと思つた。

しかし、彼女の前に立ちはだかる壁があつた……そう阿頼耶識システムだ。

阿頼耶識システムとは、ガンダムフレームに搭載されたシステムで、搭乗者の脊髄に定着させたピアスと呼ばれる金属のプラグと機体を繋げ、搭乗者の脳と機体を直接接続することでガンダムフレームを手足のように使うことができる代物だった。

つまり、阿頼耶識でガンダムフレームと直接接続することで、厄災

の天使と呼ばれたM Aを撃破することが可能になったと言えた。

しかし逆にデメリットも存在し、使い続けられ続けるほど、そのガンダムフレームとその繋がりは深くなり、最終的にはガンダムフレームはそのパイロットの魂すら喰らい、自身を動かすための部品にすると言う、文字通り悪魔の機体だった。

そして現在19歳、もうすぐ20歳になるラナカは、実質10歳……厄災戦が始まって一年、ガンダムフレームが完成したときに阿頼耶識の手術を自ら志願。その手術を三回受け、アスモデウスの搭乗に自ら志願した。阿頼耶識の手術を受けて一年……11歳の頃だった。

それから8年間、ずっと最前線でM Aと戦い、ずっと勝ち続けてきた……。しかしそれはその分だけアスモデウスに自身の体や神経を喰らわれていると言う証拠でもあった。

そして今、数機のM Aに包囲され、自身は满身創痕の機体を懸命に動かし、なんとか突破策を考えていた……。しかし、

「……（今のこの子でこの数のM Aを相手しながら逃げる……）……やっぱり無理よね」

アスモデウスのコックピットで諦めると言う言葉が脳裏にちらついたときに、一つの打開策が思い浮かんだ。

「……もうやるしかないのね……アスモデウス。貴方と相棒になって良かった……これからもよろしくね……行くよ！アスモデウス！」

アスモデウスにそう語りかけ、アスモデウスのリミッターを外す。アスモデウスの青々としたツインアイは血に似た色で輝き始めた。

リミッター解除……。それはガンダムフレームにあらかじめ付けられたパイロットを守るためのシステム。だが、そのシステムは簡単にパイロットの意思で外すことが出来る代物で、真の力を発揮するための鍵でもあった。

そして、彼女はアスモデウスのスラスタとブースターを同時に吹かせ、包囲していたM Aの1機に特攻を仕掛ける……。が、現実はその甘くはなかった。

「……ぐうう!!」

「ただ只でさえ満身創痍のアスモデウスがMモビルアーマーAに突撃を敢行したとしても、簡単に避けられ、地面に押しさえつけられるのにそう時間はかからなかった。」

「アスモデウスを地面に叩きつけたMモビルアーマーA、個体名ハシユマルは自身の足裏に搭載されたパイルバンカーでコックピットを押し潰し、機能を停止させようとする。」

「……ははっ。やっぱり……よね。ごめんなさいアスモデウス……貴方の本領を發揮できなかったわ……ほんとにごめん」

「歪むコックピットの中でラナカはそうポツリと呟いた。彼女の体がパイルバンカーで貫かれる直前に『……大丈夫。乗ってくれてありがとう』とラナカはアスモデウスがそう言ってるように聞こえ、その言葉と共にパイルバンカーを受け入れた。」

「コックピットが完全に潰され、アスモデウスは完全に機能を停止した。ハシユマルは一声咆哮をあげると、仲間のMモビルアーマーAと共に宇宙へと向かった。」

「完全に潰されたアスモデウスとパイロットには見抜きもせず
に……。」

プロローグ#2

—木星—

アスモデウスが沈黙した直後の木星で……。

「……ラナカ？」

そうポツリと呟く少年がいた。

少年は突然、自身の感覚の中から何だか大切な何かを失ったような気がした。

そんな感覚があつたが、思い出そうにも思い出せない。そんなモヤモヤとした行き場のない何かを殺意へと変換させて、目の前に佇む人工物を睨み付ける。

そしてその人工物——モビルアーマーM A、モビルスーツ個体名《ミカエル》も、彼——レギユウ・ロウ・レインの搭乗するガンダムフレームのモビルスーツM S、モビルスーツ個体名《ガン

ダムベリアル》に殺意の視線を向けながら睨み付け、両者一挙一動も見逃さないように——何時でも動けるように己の手に持つ得物の切っ先を相手に向ける。

モビルアーマーM A、ミカエルの姿は一言で表すとすれば、墮天使と表すに相応しい姿だった。

漆黒で覆われた3対6本のウイングスラスターに、血に染まつたような深紅の装甲。そして何より、ミカエルの最大の特徴とも言える部分が、胸部付近だった。胸部周辺の装甲は紅色ではなく漆黒の装甲に覆われ、その中央で赤々とコアのような部分が露出していた。顔は既に押し潰されたような形跡があり、潰されていた。

一方で、モビルスーツM S、ベリアルの姿は墮天使と表されたミカエルとは別で天使の一言に尽きる姿をしていた。

純白に見える銀色の1対2本のウイングスラスターに、その上から山吹色の天輪のような何かを取り付けられていた。

ボディは純白の装甲が主で、おも細かな部分には山吹色と緋色の装甲で覆われていた。顔のフルフェイスは、一本角の特殊なアンテナの下で、ツインアイがモスグリーンに灯っていた。

彼——レギユウ・ロウ・レインは、生まれも育ちも裕福とは言え

なかったが、天真爛漫、外で遊ぶことが特に大好きだった少年だった。
——だが、阿頼耶識の手術を受けてからは、世界現実が変わってしまった。

幾度となく襲いかかってくるM モビルアーマーAと最前線での戦闘の日々、時には味方のガンダムフレームの援護等、ありとあらゆる事をレギユウは体験してきた。その中でレギユウは、三人のガンダムフレームのパイロットに出会った。

少々言葉足らずで、無愛想で、それでも人々を守りたいと思う意思が人一倍強い《ガンダムベリト》のパイロット、《クミヨウ・レストラス》。

熱心に自身の愛機を整備し、時々レギユウに声をかけては調子はどうか、お互い頑張ろうとか、少ししつこくて五月蠅いうるさいが、武装や戦術を共に編み出したり、少なからず共に最前線で戦闘を行った戦友の《ガンダムフォルネウス》のパイロット、《マウラ・ストレイダー》。

一番最初に戦場で助太刀したのが出会いで、時折辛辣な言葉や愚痴をレギユウにぶつけてはそっぽを向く、そんな行動を繰り返していたが、マウラやクミヨウ同様に、戦場で背中を預けることの出来る数少ない友の一人《ガンダムアスモデウス》のパイロット、《ラナカ・ストーランド》。

そんな彼らは、ガンダムフレームの搭乗者で、自身と同年代の子達で知り合い、そこから行動は共にしていた。

そして、大人達からは《異端児》とも呼ばれていた。

「……………ふっ。そんな時期もあったね、ベリアル。お前に……………俺の夢、言ってたよな」

昔の記憶を思い起こしながら、そして、ベリアルに告げていた夢を思い出し、懐かしそうにレギユウはベリアルの操作レバーを撫でながらそう呟く。

「……………何時か彼奴等と一緒に、本当の居場所厄災戦を終わらせて、皆でバカ笑いしたいって……………そう言ってたよな、俺」

そこまで紡ぐとキツとミカエルの方を向く。するとミカエルも視線に答えるかのよう――

「ギユラアアアアア!!ギユルウウウウウウウウ!!」

お前の居場所墓場は此処ここだと言うかのようにミカエルはベリアルとレギユウに歪な咆哮鳴き声をあげる。

「…………… なら行こうぜ相棒ベリアル。俺達の後…………… 道の先を…………… 馬鹿野郎アグニカに繋げようぜ……………！」

そう言うのとレギユウはベリアルのリミッター忌々しい枷を外し、愛機の全スベック、本能を解き放った。

「ギユラギヤラアアギユルウウ!!」

双方の叫び声が木星を越え、宇宙全体に魂の叫びが響き渡る。

戦闘タイムンは数時間にも及んだ。その数時間の間に、ビームやダインスレイヴ魔剣の嵐が巻き起こり、周囲半径数キロ圏内には、多数のクレーターやダインスレイヴの弾丸鉄の杭が突き刺さり、辺りは殺伐としていた。勿論、街は粉々に消し飛び更地と化していた。

その戦場で最後まで立ち上がっていたのは――。

「…………… 終わったんだな。ベリアル」

ベリアルレギユウだった。

戦闘前まではピカピカだった装甲もミカエルのビーム兵器の攻撃を受け、すっかり焼け落ちてボロボロになっていた。フレームも動かすごとにガタガタと錆びた音を鳴らす始末となっていた。でも――

「まあ…………… タイマン殺し合いには勝ったんだ…………… これぐらいの犠牲は付き物だな…………… ははっ」

本人は気にしてないようだった。

「…………… さて、後は帰投して…………… あっ、推進材がもう空じゃねえか」

しかし推進材のことは考えてなかったらしく、帰投出来ない状態だった。

「…………… 仕方ない。近くに仲間が居れば拾ってもらおうか」

そう眩き、レギユウは一応救難信号を出して、その場に待機、後は
帰投するだけだった。

「…… 彼奴等は大丈夫かな……」

他の仲間達の事が心配になり、そう眩いた。その後帰投した後には
最悪ラナカの死の報告が待っていることも知らず、レギユウはフツと
息を吐いた。

プロローグ3 そして300年後（原作）へ

―木星衛生軌道上―

木星の衛生軌道上付近にあるコロニー内で……それは蠢いていた。

黒々と、そしてドロドロとした触手のような物体が何本も、何本も……コロニー内を徘徊していた。

そして、その触手のような物体の中心……コロニー内の最奥部に……それは居た。

歪な形で大きく発達、異形化し左右非対称になった腕に、頑丈そうな胸部装甲に守られたボディ、そして一つ目の顔、腰部から触手もど擬きと融合し、その姿はまさしく悪魔を体現したかのようなMモビルアーマーAだった。

それには名前奴はなかった……だから人類彼等はこう呼んだ……原点

―基地内ロビー―

「……そう……あの子が……」

最後に帰投した異端児の一人、《クミヨウ・レストラス》は友人のガンダムフレームのパイロットで、先に帰投していた、《マウラ・ストレイダー》の口から、仲間の死を聞いた。

「うぬ……ラナカが倒れてから我が友の気分が落ち込んでてな……すまないが少し慰めに言ってもらえぬか」

マウラもレギュウを気にかけてはいたが、落ち込んだレギュウを目の当たりにして、急遽クミヨウに慰め役を頼んだのだった。

「……うん。出来るだけ……頑張ってみる」

マウラからの頼みを引き受け、クミヨウは基地内のロビーを出て格納庫へ向かった。

「……心配だ……クミヨウが傷を癒してくれることを期待するしかない……私は此処まで無力だったのか……」

残されたマウラは大事な友の心の傷すら治せない、己の無力さを、

ただただ噛み締めることしか出来なかった。

―基地内機体格納庫―

レギユウは格納庫の縁に座り、ボロボロになったベリアルの見上げていた。フレームは剥き出しで、装甲もあちこちが焼け落ちていた。ツインアイは自身を映し出したかのような色でレギユウを一瞥するかのように見ていた。レギユウ自身もボロボロで、あちこち傷だらけで包帯をしていた。

「…………… バラバラになっちゃったな、ベリアル。あれだけ皆揃ってバカ笑いしたいって…………… そう言ってたんだけどな……………」

そんなことを呟いてレギユウは目をベリアルから逸らし格納庫の床に向ける。その目には何時もの鮮やかな藤色の瞳はなく、光を失いくすんだ紫色のようなどんよりとした暗い色になっていた。

「…………… 大事な戦友が逝ってしまったのか？」

隣に目を向けるとそこには――、

「…………… カイエル」

ガンダムフレームのM^{モビルスーツ}S、ガンダムバエルのパイロット、《アグニカ・カイエル》の姿があった。青い髪に赤く鮮やかな深紅の瞳、クルなのに少しお茶目で、たまに大人っぽい一面がある、そんな彼が何故こんなところに？そんなレギユウの考えが通じたのか、

「何、ちよつとした気晴らしに來ただけさ、隣座るぞ？」

そう言っって自身の座っている隣に腰を下ろして、アグニカはレギユウに、

「人間が死ぬのは普通の事だ。死んだ奴にはまた会えるって奴さ。それまで俺達は戦い続けて、この厄災^{地獄}戦を終わらせる。そしたら…………… ラナカだったか？そいつも満足してくれるだろ」

そんなことを話しかけてきた。

「…………… やっぱ強いね、カイエルって…………… 俺は全然強くない…………… だから――」

レギユウは虚ろな瞳に少しの光を宿して返事の続きを紡ごうとした直後だった。

「まあた面倒事に首突っ込んでるの？カイエル」

そんな声が格納庫の入り口付近から響いた。

レギユウとアグニカが後ろを向くと、そこには深い藍色の髪を肩まで伸ばして、澄んだ翡翠色の瞳の子供が立っていた。13、4ぐらいの少女だった。

「あー……、少し相談事に乗ってたんだよラクス」

アグニカにラクスと呼ばれた少女――ガンダムフレームのMS、モビルスーツ、ガンダムバルバトスのパイロット、《ゼファール・ラクス》はスタスタとアグニカとレギユウの元に歩きながらふーんと言ってアグニカとは逆の……レギユウの左側に座って、

「相談事なら私にも話して。乗れたら乗るよ？」

そう言って来ました。

「えっと……ありがとうございます」

「これからは敬語は無しね！私たちは友人なんだから、ね？」

レギユウはすっかり感謝の言葉を言ったら、ラクスに敬語は無しと告げられ、苦笑した。

それからレギユウは、アグニカ、そしてラクスの二人にアドバイスを教えて貰い、その後からは三人の体験談を語り合うようになった。時間が経つのは早い、そう思ったのは何時ぶりだろうか。

「今日はありがとう、カイエル、ラクス。すつきりした」

「友達を気にするのは当たり前だろ？」

「そうそう、今度また土産話を語り合おうよ！」

そう喋ってから別れ、アグニカとラクスは自身の場所へと向かった。

「さて！戻るか！」

そう言っ自身ホームの居場所へと歩いていった。その瞳には再び光が灯り、やる気に満ちていた。その後ろ姿を見る人影が一つあった。

「……良かった」

その人影はクミヨウだった。

アグニカとラクスをレギユウに相談させたのはクミヨウだったのだ。正直言っクミヨウから直接話すにはある程度の抵抗があっ

た。他力本願……まさに言葉のままだったが、成功したのなら結果オーライ。そう思ったクミヨウだった。

—月面—

「……ふう。私ながら頑張った方だと思っただが、どう思う？我が友」

「さあね、それは自分の相棒に聞いた方がいいんじゃないのか？マウラ」

そんな話をしながらマウラとレギュウは各々の搭乗するM^{モビルスーツ}Sのフォルネウスとベリアルを背中合わせにして構えていた。フォルネウスの隣には……二足歩行型のM^{モビルアーマー}Aが居た。白銀のボディに漆黒のフレーム、特徴的な顔のようなユニットを持つM^{モビルアーマー}A、個体名《ソロネ》はフォルネウスとマウラによく馴染んでおり、たまに様子を見に来るレギュウにも慣れているため、よくボディを組まされることもしばしば。

そんな3機は今……物凄くピンチに陥っていた。何機ものM^{モビルアーマー}Aが包囲し、逃げられないように武装を全面展開し、殺気だつていた。

「まあどのみち俺達は此処で散るだろうな」

「うぬ……。覚悟はできているぞ」

「いや早過ぎるだろ流石に。もう少し頑張ろうぜ」

そんなM^{モビルアーマー}A達の殺気すら見えてないかのように、レギュウとマウラは会話を続ける。

「ま、今は亡き友たちの為にも、頑張るぞ」

「クミヨウは冷凍保存されてるけどな」

レギュウ達は寂しそうにそう会話するのを最後に、スラストとブースターを吹かして同時に突撃を開始する。ソロネはマウラ……フォルネウスと共に突撃した。

……
異端児と呼ばれた四人の少年少女は、アグニカ・カイエルやその他のガンダムフレームのパイロット達に未来を託すために戦

い、そしてその命を散らした……。無駄な死等ではなく、榮譽ある死としてだった。

ラナカ・ストーランド、マウラ・ストレイダー、レギユウ・ロウ・レインの三人は戦死し、クミヨウ・レストラスは死ではなく眠りについた。
——コールドスリープ冷凍保存を使って、自身の相棒、ガンダムベリトと共に、火星ハーフメタルと高硬度レアアロイの二重構造を施した球体に入り、長い宇宙の旅に漕ぎ出したのだった。

そしてその後、アグニカ・カイエルがオリジンを撃破し厄災戦を終結させ、世界は平和となった。

——だがそれは序章に過ぎなかったことだった。

300年後に再び集うことすら知らずに……。歯車は動き始める

一期編

鉄と華と…… 異分子（イレギュラー）と

—火星—

砂塵が吹き荒れる荒野の中…… その中を歩く一人の少年が居た。

くすんだら黄土色のハーフズボンに黒の袖無しシャツ。その上からフードの付いた茶色のローブを羽織った、150センチ程の小柄な体格の少年だった。ローブは長年使われ、使い古された形跡があり、所々に穴が開いたりとボロボロに劣化していた。

右腰には彼が護身用として愛用している拳銃がホルスターで吊られ、何時でもホルスターから抜ける位置にあつた。

やがて砂嵐が収まり視界が回復してくると、彼の目の前に切り立った崖が聳え立っていた。その崖の——彼の視界の目の前にポツカリと穴が口を開けていた。穴の先は暗闇で満たされ、奥はよく見えなくなっている。

「…… あつた」

彼の口から小さく声が漏れた。小さな声で呟いた後、すぐに穴に飛び込み洞窟の地面に着地すると、奥へ駆け出した。

洞窟の中は右へ左へ…… 分かれ道が続き、入り組んだ、迷宮のようなその中を、迷わず足を進め、ズンズンと奥に進んでいく。まるで前に来たかのような足取りだった。

奥に進むこと約1分。彼の視界がだんだん明るくなってきた。普通なら洞窟から外に出たと思うのが普通だ。そう…… 普通なら、の話だ。

洞窟の最奥部…… その空間は大きな空洞になっていた。あちこちには電球があり、部屋の隅にはメイスやM S用の弾丸などが乱雑に置かれていた。そんな空間の奥の壁には…… 明かりがなくて判断出来ないが、M Sのような影があつた。

彼は手前にあり、上に上がっていたレバーを下に下げると、

ブウウウウンと音が響き、一斉に電球が光り、薄暗かった空間が一気に明るくなる。すると、奥に鎮座するM^{モビルスーツ}Sの全容が明らかになった。かつてM^{モビルアーマー}A300年前に起こった、人類対M^{モビルアーマー}Aとの戦争……厄災戦でM^{モビルアーマー}Aに対抗するために天^{モビルアーマー}使達を模して造られた悪魔達……ガンダムフレームの1機。悪魔の名を冠されたその機体の名は……ガンダムベリアル。

朱と純白と山吹色で染められた装甲。ツインアイは当時とは違い、右が深紅、左はモスグリーンに付け替えられ、バックパックに特徴的な巨大ブレード。そして……300年後のこの世界では禁忌の装備に指定されている小型展開式の魔^{ダインスレイヴ}剣がバックパックの右側に装備されていた。

当時はボロボロだったものがピカピカになっているのは、どっかの誰かの気配り配慮なのだろうか……彼にとっては一人しか思い浮かばないが。

「お前なんだろう？カリエル……相棒^{ベリアル}を直して、此処に置いてくれたのは」

彼はそう言うのと今まで被っていたフードを頭から外す。

ボサボサの銀髪に右の眼は深紅、左は藤色の瞳になっている少年――300年前に死んだはずのレギユウ・ロウ・レインが居た。だが、昔のレギユウではなく、今は端虚^{はしぞら}レギユウと名乗り生きる……傭兵^{オルフェン}紛いの孤児だった。

「……推進材よし、うーん……あと武装はドラグネイルと脚部のナイフだけか……ダインスレイヴ？ダメだ。昔はバカスカ撃つてたけど今はダメだ。撃てたとしても二発が限界だな」

ある程度整備されたベリアルはほぼ厄災戦のままの姿だった。そんなベリアルを前にブツブツと一人で喋り続ける。ベリアルとレギユウは当時からずっと一緒に、アグニカ程ではなかったが、魂までもが一体化したかのような存在だった。そんなときだった――。

「…… うおっ!？」

突然爆発のような衝撃が起き、空間を揺らしたのだった。

咄嗟の事で回避が間に合わず転倒する。

「痛たた…… やっぱり、長い間戦闘してなかったから…… 体が鈍^{なま}つてるな…… っと」

起き上がりながらそう言うと、跳躍して体を立たせる。首をコキコキと鳴らして準備運動をし、意思だけでベリアルのコックピットハッチを開かせてコックピット目掛けてジャンプする。ベリアルの膝を使つて駆け上がりベストなタイミングでコックピットハッチが開き切るとコックピットの目の前ギリギリでジャンプする。ローブが上にはためきレギュウの脊椎の辺りには縦一列に3つの金属のでっぱりがあった。そのデッパリ目掛けてコックピット席の背もたれから阿頼耶識用の接続コードが射出され、デッパリとピツタリ接続されると、コードが巻き取られ、そのままレギュウの体はコックピットの中にすっぽりと収まる。ハッチが閉まり自動で網膜投影がスタートされ、ベリアルが起動される。

「この辺りには確か……
クリュセ・ガード・セキュリティ
C G S…… だったか、民間企業があつたはず。そこを襲撃するとは…… 盗賊かなにかだといいな」

ベリアルを操作して隅に立て掛けてあつたメイスを掴み、バックパックのスラスタを噴射させ、入ってきた穴の隣にあつた別の穴に入り、直進する。さっきの入り組んだ道とは違い、コンクリートで整備され、直線になつていた。その奥、入口にはM^{モビルスーツ}Sサイズの金属製のドアで塞がれていた。

「めんどくさいからな…… ごめんカイエル!」

そう言い手に持つメイスを思いつきり突き出し豪快に破壊する。

轟音と砂煙と共に外へ飛び出したベリアルのメイスは…… 偶然なのか不幸なのか、オーリス・ステンジャが搭乗するギャラルホルン製のM^{モビルスーツ}S、グレイズのコックピットごと貫き通していた。ついぞと言わんばかりに時間差でメイスの先端にあつたパイルバンカーが飛び出してコックピットにさらに追撃を与え、パイルバンカーはグレイ

ズのバックパックを貫通するほどの威力だった。グレイズに蹴られかけていた茶色っぽいM Wはギリギリ蹴られずに済んだようで、ハッチを開けてレギュウの乗るベリアルを見上げ、目を見開いていた。

ダンジ hide

「基地がっ!!」

緑色のM Sが基地を砲撃して、ビルに着弾したんだ。

「やめろー!!そこには俺の仲間がー!!」

団長から許可を貰って余っていたM Wを使って俺は全力で攻撃したんだ。だけどそのM Sには通じなかったんだ…。それどころかM Sが俺の乗ってるM W目掛けて蹴ってきたんだ。

俺は死ぬ—— そう思った時だったんだ……。

激しい音と衝撃がして、俺は咄嗟に目を瞑ったんだ。だけど、何時まで経っても最期の時が訪れなかったんだ。

俺は不思議に思ってハッチを開けて外を向いたんだ。それで俺は目を見開いて驚いたんだ。そこには赤くて綺麗なM Sが緑色のM Sに棍棒みたいな物を刺していたんだ。緑色のM Sはグツタリとして倒れたんだ。それを見て俺は—— 意識を手放した。

ダンジ hide out

「……さて、と。彼処…… CGSの所に置いとけば襲われないか」

意識を失った少年の乗るM Wを大事に持ち上げベリアルの首を動かし、CGSの基地に視点を合わせ、視界をズームさせる。そこには沢山のM Wが居た。今持っているM Wと同じ茶色っぽいようだった。——と。

「……おっと」

後ろからの銃撃を容易くかわし、そっちを見るとさっきと同じグレイズが2機立っており、1機は右手持つライフルの銃口を下ろし、『よくもオーリス隊長をおお!!』

左手のバトルアックスを構え、スラスターを吹かしこちらに向かつてくる。

『やめろアイン！俺が向かうまで待っている！』

別のグレイズからの通信で、向かってくるグレイズのパイロットの名はアインと言うことが分かった。

「悪いが、今お前らを相手する暇は……無いのでね！」

両手が使えない——そんなハンデがあるレギユウだが、阿頼耶識をフル活用して脚にあるナイフを展開し、左脚でバトルアックスの刃を弾き、瞬時に右脚に切り換え蹴りあげる。アインの乗るグレイズは空高く舞い上がり倒れ込む。

『アインっ!!』

「少し止まってくれ、あえて言うがこれは俺にとっては正当防衛だと思う。まあ……お前らの隊長さんを殺ってしまったのは悪かったが」

もう1機のグレイズが突撃してくる前に俺は通信を開き話しかける。

『貴様……子供だど?!』

相手は驚き攻撃する素振りを止めた。

「悪かったな子供で……んで、取引をしないか？」

『取引だど?』

提案に素直に乗ってきた相手にレギユウは条件を提示した。

「まあ……簡単に言ったら攻撃をやめて撤退してくれって話だ……その代わりに」

『……その代わり?』

「……そっちから代表を一人選出して再び此処に来てくれ。決闘をする」

レギユウは条件の後に反応した相手に代わりの案を告げた。

『決闘?』

「ああ。300年前には結構あったって話だ……そう言えばあんたの名前は？」

疑問を持った相手にレギユウはそう教え、相手の名前を聞く。

『……ギャラルホルン火星支部実働部隊所属、クランク・ゼントだ』
「クランクさんだな。俺はレギユウ。端虚レギユウだ。帰るならそこに伸びているグレイズ回収していつてくれないか？ 決闘の時間についてはその都合で来てくれても構わない」

『……感謝する』

そう言うときクランクの乗るグレイズはアインの乗るグレイズを抱き上げ、そのまま撤退した。

「さて……行くか」

そう言うときベリアルを操作し、改めて手の中のMモビルワーカーWを大事に持つとゆつくりとバックパックのスラストターを吹かし、
Cクリュセ・ガード Gセキユリテイ S
へと向かわせる。

鉄華団

クリユセ・ガード・セキュリテイー

— C G S 建物内 —

「へー…… 此処がCGS内部か……。 案外昔の基地と変わらないな」

壁に手を当て伝って歩きながら歩き回っていたレギユウははあ、と短く溜め息を吐いた。

— 回想 —

「ちよつと良いか？」

俺が運んできたMモビルワーカー Wから救出された少年…… ダンジとピンク

のMモビルワーカー W（正直言うとレギユウは引いた）から出てきた少年…… ノルバ・シノがお互いに労っている光景を見届け、ベリアルに戻ろうとしたレギユウに声がかかる。

レギユウが立ち止まりそつちを向くと、190センチはありそうな色黒の巨体に前髪が特徴的な銀髪に黄色の瞳をたたえた男が立っていた。

「俺はここの参番組隊長、オルガ・イツカです。うちの隊員を救ってくれてありがとうございます」

敬語で挨拶と感謝の言葉を言うオルガと名乗る男を見て、

「…… 端虚レギユウだ。レギユウと呼んでくれ。助けたのは必然的偶然、運が良かっただけだ」

そう言うのと踵を返して歩いていく。オルガ達は目を丸くしてレギユウの後ろ姿を見送ることしかできなかつた。

「はあ…… 何であんなキツイこと言ったのかなあ……」

レギユウはオルガに放った言葉に頭を抱えていると、

「待ってくださいー！」

今度は誰だと思いながらも後ろを振り向くと、金髪を腰までのぼし、高貴な服に身を包んだ女性が立っていた。

「…… 私はクーデリア・藍那・バーンスタインです。貴方の名前を教え

てくれませんか？」

「…… 端虚レギュウだ。レギュウと呼んでくれ」

そう自己紹介するとクーデリアがすつと右手を差し出してきた。その意図を知っているレギュウは迷わずクーデリアの右手を自身の右手で握る。

「あ、握手を知ってるのですか!？」

「握手ぐらいなら普通だろ。むしろ知らない奴は居ないんじゃないか？」

驚くクーデリアの手を離しそう言うのとレギュウは踵を返しベリアルの置いてある格納庫へ歩みを進め始める。

クーデリアは離れて行くレギュウを見つめ、

(彼もどこかで苦しんでいる……。私が……。彼に出来ることは……。：……。何か……。)

ギョツと手を握り、レギュウの後ろ姿を見ることしか出来なかった……。

夕日に照らされる荒野の中、2機のM^{モビルスーツ}Sが佇んでいた。

1機は特徴的なアンテナにバックパックにはブレードとよくわからない棒のようなものを装備した緋色のM^{モビルスーツ}S、ガンダムベリアル。

対峙するもう1機は深緑と緑色のカラーリングに黄色のモノアイ(?)でベリアルよりも無骨な、ギャラルホルンの標準的なM^{モビルスーツ}S、グレイズ。

「…… 本当に単機で来るとはね」

『責任を抱えるのは俺一人で十分だ』

「また責任強い人だね、後輩に言わなくて良かったのか？」

『止められたが、無視してきた』

「そうかい」

コックピットから互いに通信で一言二言会話を交わすとそれきり両者は会話を止め、相手の挙動を見逃さないように各々の手に持つ得物——グレイズはバトルアックスを、ベリアルは大太刀を構え、相手に向ける。

『…ギャラルホルン火星支部所属！クランク・ゼント！』

「えーと……端虚レギウウ」

『「参る！（行くぞ）」』

同時にスラストアーを吹かしバトルアックスと大太刀をぶつけ合う。少量の火花が散り、両方が弾かれ、再びぶつかり、今度は弾かれずにそのまま鏢迫り合いに持ち込む。

『ぐーそんな骨董品のMモビルスーツSで、このグレイズに勝てると思っっているのか！』

グレイズの頭が開き一つ目が現れる。

「グレイズ？それがそのMモビルスーツSの名前なのか、ベリアルofのデータベースに無いと思ったら300年後の代物か。まあ、勝てる勝てないの問題じゃない……何処まで相棒を信じて戦えるかが問題だ！」

レギウウはそう叫ぶとツインリアクターシステムを強引に使い押し込み始める。

『ぬお!?押し切られるだど!?……くっ!』

押し切られると察したクランクはすぐにグレイズを下げる。

「ちよ!?」

支えが無くなったからかレギウウの乗るベリアルが前のめりに倒れる。

『貰ったぞー!』

すぐにスラストアーでグレイズを接近させ、バトルアックスを振り上げ、ベリアルに振り下ろそうと力を掛ける。

「舐めるなあ!!」

レギウウは阿頼耶識を通じてバク宙の要領で脚部ブレードを展開し器用にバトルアックスの刃にぶつけ、アックスを弾き、同時に体勢を立て直す。

『何!?今のは……阿頼耶識だど!?』

レギウウの芸当を見てそう叫んだクランクに少しの隙が出来る。

「脇ががら空きだぞー!」

レギウウがそう言いスラストアーでグレイズの懐に潜り込み、鞘ごと大太刀を抜きグレイズに打ち込む。

『ぐう!!』

グレイズはその体を浮かせ、三メートル以上離れた地面に倒れる。ベリアルは無慈悲にも鞘から抜いた大太刀でグレイズの両手両足を切断しダルマ状態にして、グレイズのコックピットハッチを強引にこじ開ける。

「クランクさーん、死んでないよね？」

レギュウもベリアルのコックピットハッチを開け、クランクに声を掛ける。

「うっ、うう……」

クランクは起き上がりながらそう呻く。破片が頭に直撃したのか、額からは血を流している。

「ほら、起きてくれなきゃ俺が困る」

ベリアルから器用にグレイズのコックピットに入り込み、クランクを抱き起こす。

「……何故だ。何故……俺を助ける……」

クランクはベリアルの手に寝かせられながらコックピットに戻ろうとするレギュウにそう聞く。

「……俺はお前らとは争ったりはしていない。だから助ける。怪我人を見捨てるなどもっての他だ」

そう言うときコックピットハッチを閉め、クランクに負担が掛からないように立ち上がり、スラスターを使わず徒歩でCGSに戻り始める。

「あ、そうだ、帰ったら聞きたいことが沢山あるから……休んだら答えてくれるか？」

「ああ……答えよう……」

ベリアルからの声にそう答えるとクランクはそっと目を閉じ、意識を手放した。安心感からなのか、すんなり手放すことが出来た。

それをベリアルを介してモニターから見届けたレギュウは安堵しながらCGSに帰投した。